# 観光資源としての中国古代民衆運動

## ――秦漢時代の民衆運動関連史跡とその活用――

柴　田　　昇

### 1、はじめに

中国では古くからしばしば民衆運動・農民反乱が王朝崩壊のきっかけとなった。そして歴史上の民衆運動において中核的存在となった人物の中には、漢の高祖劉邦のように自らが王朝創始者となった者もおり、近年の関連研究は多いとは言えないものの、民衆運動が中国史の展開における重要なファクターでありつづけていることにかわりはない。

筆者は2008～2009年に3回にわたって、山東・河南・湖北・安徽・陝西・江蘇・浙江の各省での調査旅行に参加し、各地で秦漢～隋唐期の民衆運動・農民反乱に関する遺跡・施設等を参観する機械に恵まれた[i]。本稿ではその中から、2008年の3月及び10月に参観し得た中国古代の主要民衆運動に関わるいくつかの地点について、若干の報告を行いたい。歴史はさまざまな形で現在に伝えられ、保存・顕彰の対象となったり、また現代の人間によって研究対象・観光資源等のさまざまな形で活用されたりしてゆく。そのような観点から言えば、本稿は現代中国における歴史的事象・史跡活用の実態の一例を紹介するものであると同時に、中国における文化遺産観光の可能性に関する事例報告としての意味を持つかもしれない。

### 2、2008年3月8日――赤眉の乱――

最初に報告するのは、2008年3月6日～13日の山東省・安徽省・江蘇省にまたがる調査旅行である。筆者は3月5日に名古屋を出発、大阪府内で一泊して、6日の早朝に関西国際空港にて調査チームと合流、青島国際空港に向かった。われわれの調査旅行では秦末の陳勝呉広の乱から唐末の黄巣の乱まで幅広い時代に関連する地点を参観しているが、本稿ではその中から、秦末漢初期・両漢交替期に関連するものに限定した紹介を行いたい。

3月8日、われわれは朝早く山東省泰安市の宿舎を出発し、近辺のいくつかの参観ポイントを経て、午後に泰安市泰山区に向かった。通常の泰山観光では、岱廟から北に向かう紅門路を経て中路遊覧区をめぐるコースが利用されることが多いが、今回われわれが参観したのは、あまり観光開発のなされていない西路遊覧区に位置する、赤眉集団の砦の跡とされる天勝寨の遺跡である。

赤眉の乱とは、前漢末期に発生した民衆反乱である。天鳳五年（18）に莒県で蜂起し赤眉集団の中核的勢力となった樊崇の集団は、後に泰山に移動しそこを拠点とした。この軍団は、最終的には長安に進出し、漢室の後裔である劉盆子を皇帝に擁立するに至るが、略奪・強盗を繰り返し、奪うもののなくなった宮殿に火を放つ、漢室の墓を盗掘する等の乱行を繰り返し、短期間で劉秀軍に投降したと伝えられる。樊崇集団は農民を中心とする集団だったため旗印や号令等の制度がなく、王莽の軍団と戦う際に、味方を識別するための目印として眉を朱に染め

写真 1　天勝寨への坂道

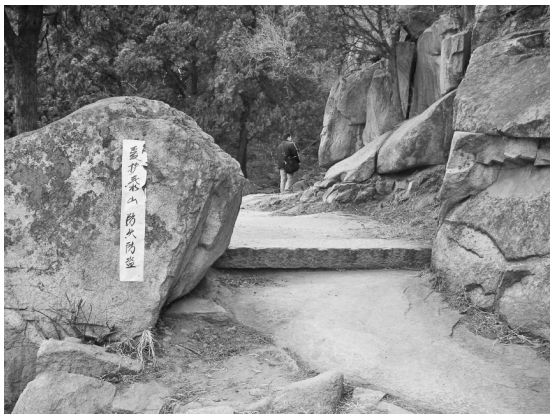

写真 2　天勝寨寨門

写真 3　天勝寨内部

写真 4　天勝寨近くの石積み

たという（『漢書』王莽伝下、『後漢書』劉盆子伝等）。

山のふもとでマイクロバスを降り、石段を登り始めて約 20 分、天勝寨に到着する。天勝寨遺跡には寨門（写真 2）と 50 cm～1 m 程度の石積みの壁（写真 3）がある。また塞近辺にも砦の跡とされる石積みが残されており、ガイドの説明ではそれらは赤眉の時代に作られたものとのことだったが、赤眉集団が築いた約二千年前のものがそのまま残ったものとは到底思われない。天勝寨遺跡の付近にはやや広い平地もあり、馬場・練武場と説明されていた。

遺跡近辺からは傲徠峰・扇子崖を望むことができ、なかなか景色の良い場所だったが、看板等もほとんど見られず、訪れる人は少ないようだった。観光ポイントとしては、泰山という非常に有名な観光地のすぐ近くでありながら、市政府のホームページに若干の紹介こそ掲載されているものの、実質的に放置状態である。近隣大学の学生のハイキングコースとしてはかなり活用されているようで、われわれの見学中にも 10 名程度の若者が歩いている姿を見かけた。

### 3、2008 年 3 月 9 日――漢の高祖劉邦――

8 日の夜は曲阜に宿泊、翌 9 日は曲阜を午前中見学し、午後の早い時間に江蘇省に移動した。江蘇での参観ポイントは、漢帝国の創始者劉邦の故地、沛県・豊県である。『史記』高祖本紀によれば、「沛の豊邑の中陽里の人」劉邦は、秦末の混乱期に父老らに推戴されて沛公と

写真 5　歌風台

写真 6　劉邦像

写真 7　豊県駅前の劉邦像

写真 8　鳳鳴園

なり挙兵、はじめは項羽と行動をともにしたが、後には項羽と天下争奪戦を繰り広げ、最終的に漢帝国を創建するに至った。

沛県では、町の中心部にある歌風台（写真 5）を参観した。3 階建ての建物の 1・2 階は博物館になっているが、写真パネル展示が多い。3 階には大風歌碑・劉邦像（写真 6）などがある。劉邦は高祖十二年（前 195）に淮南王英布の謀反を征討し、その帰路に故郷の沛に立ち寄って酒宴を開き、筑を撃ちつつ自ら歌った（『史記』高祖本紀）。大風歌碑は後の人がその歌を石に刻んだものだという。歌風台のすぐ近くには高祖の原廟があったが、時間の都合で見学はできなかった。高祖原廟の前の広場には 20 近いビリヤード台が列なっており、若者たちがビリヤードに興じていた。

マイクロバスで豊県に移動。バスの中から豊県駅前の劉邦像（写真 7）を見て、続いて鳳鳴公園を訪れた。中央に池のあるかなり大きな公園である。『史記』高祖本紀・『漢書』高帝紀には、劉邦の母が川べりで休んでいる時に龍に感じて劉邦を身ごもったとの感生帝説話が記されているが、同行していた現地ガイドによればこの公園の池のあたりこそがその場所だという（写真 8）。

その後、豊県の市街地からやや離れた漢皇祖陵園に移動した。漢皇祖陵近辺は住民の 90％

写真 9　劉邦像

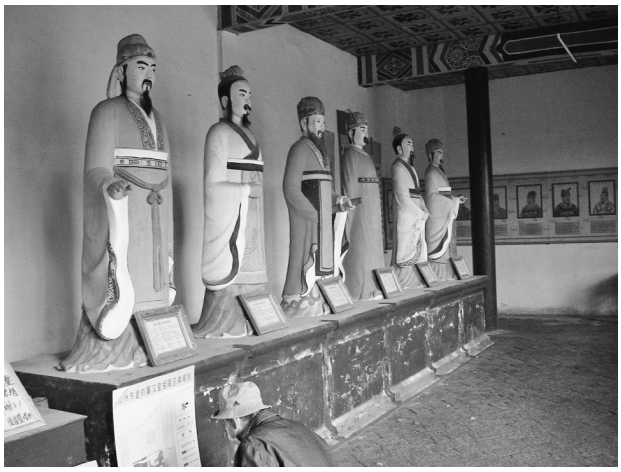

写真 10　漢皇帝廟

が劉氏とのこと。この地域では、劉氏発祥の地として全世界の劉氏から寄付金を募り、漢陵の整備を続けている。『漢書』では劉氏は堯を継ぐものとされているが、陵園内には劉邦像（写真 9）の他に、堯以来、劉備に至るまでの劉氏の碑があり、また両漢皇帝をまつる廟（写真 10）がある。現在、2020 年までの予定で、漢陵再開発計画が進行中とのことだった。

総じて沛県・豊県では、劉邦を地域のシンボルとして顕彰する動きが盛んで、劉氏の故地であることを観光開発の中心に据えようとしているようだ。ただ、劉邦の場合、一介の庶民から身を起こしたとはいえ、最終的には漢帝国の創始者となった中国史上最高の有名人の一人なのだから、これを民衆運動の顕彰という枠組みの中でとらえ得るかどうかは問題が残る。

## 4、2008 年 3 月 10 日――陳勝呉広の乱――

前夜は徐州に宿泊、午前中に漢楚王陵・画像石芸術館等を見学した。昼食を終えた後、安徽省宿州市の中心部でそれまでのっていたマイクロバスからワゴン車に乗り換え、参観ポイントの宿州市埇橋区西寺坡鎮涉故台村に向かった。車を乗り換えたのは、途中に道が狭くマイクロバスでは通行困難な地点があったからである。

今日の目的地は、陳勝呉広の乱の起点となった大澤郷にあたるとされる地点。陳勝呉広の乱とは、秦帝国滅亡のきっかけをつくった事件として『史記』に特筆されている、「王侯将相いずくんぞ種あらんや」とのスローガンでも広く知られる民衆反乱である。『史記』陳涉世家によれば、秦の二世皇帝元年（前 209）7 月、王朝の徴発により移動中に大澤郷に宿営していた一行は、大雨に遭い動けなくなり、期日に間に合わないことが確実となった。到着期日に遅れた者は、秦の法により死刑である。これに対して一行の中にいた陳勝と呉広は、引率の尉を殺し、祭壇をつくって盟いを立て、陳勝は将軍、呉広は都尉となって蜂起した。陳勝呉広の乱自体は 6 ヶ月程度で終息したが、この反乱はこれに呼応する各地の民衆蜂起を引き起こし、秦帝国滅亡のきっかけとなった。

道を間違えて若干時間をとったものの、30 分程度で涉故台村の陳勝呉広起義遺址に到着す

写真 11　陳勝呉広起義遺址入口

写真 12　大理石の雕像

写真 13　涉故台に登る階段

写真 14　涉故台壇上

る。入り口の門（写真 11）をくぐり、しばらく歩くと巨大な記念像（写真 12）が見えてくる。陳勝呉広の乱を描いた大理石の雕像で、土台部分に記されている「陳勝呉広彫像落成紀略」には、高さ地上 9 m・重さ 120 t で、1986 年に製作されたとある。その横を通り抜けて、陳勝・呉広らが誓盟を行ったとされる涉故台の跡に向かう。宿州市人民政府のホームページによれば、涉故台（射鼓台とも）は、高さ 4.6～3.2 m、東西 67.6 m・南北 65.5 m、面積 4427.8㎡の壇である。壇上には明万暦・清道光・清光緒・民国 29 年の四つの碑が立っていた。また、近隣住民の話では涉故台周辺は雨天時には水量が増し水びたしになりやすいとのことで、その点に関しては『史記』に見える大澤郷の記述と符合している。

涉故台のすぐ近くには、今回の旅行では参観していないが、陳勝呉広起義紀念館がある。壇の周囲は農地がひろがっていて、涉故台壇上は近隣住民のいこいの場といった雰囲気である。涉故台に上る階段あたりには近隣に住む老人や子どものくつろぐ姿がみられた。

### 5、2008 年 10 月 12・13 日――緑林の乱・後漢の光武帝劉秀――

本節では、2008 年 10 月の第二回調査旅行について報告する。筆者は 10 月 11 日の朝に中部国際空港を出発し、上海浦東国際空港で調査チームの他のメンバーと落ち合い、再び飛行機に乗って武漢へ向かった。この 10 月の調査旅行では、11～19 日の九日間で湖北省・河南省

・陝西省をまわったが、本稿では紙幅の都合により湖北省の訪問地 2 箇所のみについて紹介することとしたい。

11 日夜は武漢に宿泊し、翌朝 7 時 20 分にホテルを出発。安陸を経て、本日 10 月 12 日の目的地である湖北省荊門市京山県緑林鎮に向かう。緑林鎮を含む大洪山風景名勝区は、1988 年に国家重点風景名勝区に指定されている。

緑林山は王匡・王鳳の率いた民衆反乱集団の根拠地とされる。王莽の時代に、窮乏農民等を組織して挙兵した王匡らは、近隣集落を襲撃、緑林山にたてこもり、以後ここを根拠地として軍事活動を行った。緑林軍を率いた王匡・王鳳は、緑林軍解散後、南陽で新たに軍団「新市兵」を編成、陳牧・廖湛率いる平林兵や後の光武帝劉秀の部隊と合流し、反王莽の連合軍を結成することになる（『後漢書』劉玄伝）。

入り口に待機していた兵士の出迎え（写真 15）を経て緑林古兵塞へ。緑林寨風景区は面積約 10 km$^2$、その中には王匡・王鳳と劉縯・劉秀が会盟を行った場所とされる会盟台や、王鳳の初建と伝えられる栖鳳寺、劉秀の軍によってひらかれたとされる古漢梯田などがある。牛にまたがった劉秀像（写真 16）があるのは、『後漢書』光武帝紀に劉秀は蜂起当初は馬ではなく牛にのっていたとあるのによる。頂上付近（海抜約 830 m）の緑林山南兵寨遺址（写真 18～20）には祭天台・中軍大営・拝将台等が復元されており、またわれわれは実見することがで

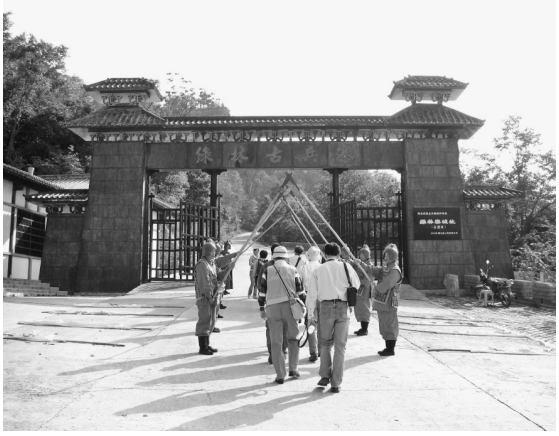

写真 15　緑林古兵塞入口

写真 16　劉秀像

写真 17　北兵寨

写真 18　南兵寨

写真 19　南兵寨

写真 20　南兵寨　拝将台

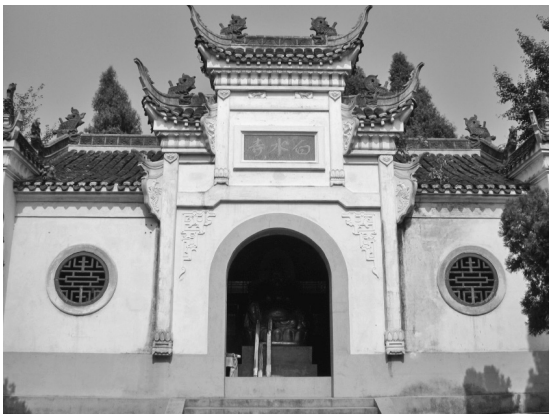

写真 21　白水寺

写真 22　劉秀像

きなかったが、漢代の軍事文化の表演も行われているとのことである。

山全体が緑林起義のテーマパークとして観光開発されていることになるが、われわれの参観した日は快晴の日曜日であったにもかかわらず観光客は多いとは言えない状態だった。また射的場などが設置されていて観光客に見せるポイントとして最も力を入れて造られていると思われる南兵寨遺址付近が特に観光客の姿がまばらだった。

その原因の一つとしては、南兵寨遺址がその他の施設からかなり離れているのに近くまで行くバス等がなく（施設内バスはあるが、バス停から南兵寨遺址までかなり距離がある）、老人・小児等の参観を困難にしていることが挙げられよう。観光施設としての幅広い認知を得るには、施設内移動手段の整備、娯楽施設・休息施設の配置等にさらに工夫が必要であるように思われた。なおこの地域に日本人が訪れるのは非常に珍しいとのことで、夕食時には、かつて日本を訪問したことがあるという大洪山旅游開発公司総経理の訪問を受けた。

翌 13 日は、マイクロバスに乗り高速道路で棗陽市呉店鎮の白水寺に向かう。いくつかの参観ポイントを経由して、11 時 30 分頃到着。呉店鎮は後漢の光武帝劉秀の故里とされ、南陽劉氏決起、光武中興開始の地として知られる。まず白水寺の南にある白水碑廊を参観。「東漢古帝郷」「漢更始帝劉玄故里」「漢世祖光武帝故里」等の碑が見られる。続いてやや長い階段を上って白水寺（写真 21）へ。白水寺の始建は元の至正三年（1343）にさかのぼり、その中には劉秀殿が設けられ、光武帝が祀られている。同じく白水寺中の兵器殿には牛にのった劉秀像

（写真 22）がある。

白水寺を含む白水寺風景名勝区は白水湖周辺のやや広い地域全体を指す。われわれが参観し得たのはその中の白水寺と白水碑廊のみだが、いずれも比較的きれいに整備されていた。われわれが訪れた時は、平日の正午頃ということもあり観光客は少なかった。白水寺周辺も、のどかで緑にあふれた農村といった風情である。地域が後漢の皇帝となった劉氏の故里であることを誇り劉秀を地元のシンボルとして顕彰するところに成立している、観光地としてまだ開発され過ぎていない観光地というところだろうか。

## 6、小　　結

本稿では、秦漢期の民衆運動が現在どのようなかたちで歴史的遺産として顕彰・活用されているかという視点から、秦末漢初期・両漢交替期の民衆運動とその関連地点について、若干の紹介を行った。ほとんど放置された状態のものからテーマパークとして開発が進められているものまでいろいろなケースがあったが、北京オリンピック開催前後の中国における史跡活用・文化遺産観光の記録として何らかの意味を持つものになっていれば幸いである。中国では現在、共産党の革命の故地を訪ねる紅色観光が推進されており、今後民衆の力の端的な発露としてそれと共通性をもつ歴史上の民衆運動遺跡が観光の対象として注目され始める可能性も考えられよう。

しかし同時に、今の中国で農民反乱の歴史的文化遺産に注目することは何らかの問題を伴うものでもあるだろう。農民暴動の多発は現在の中国政府にとってかなりデリケートな問題となっており、民衆運動・農民運動への注目は現体制にとって必ずしも好ましいこととは言えない。歴史に事寄せて現在を論じるのは中国知識人の伝統的なスタイルだが、貧富の差の拡大、都市と農村の格差の拡大と、各地での農民暴動の頻発、そしてそれらとは裏腹に和諧社会というスローガンが叫ばれる錯綜した状況の中で、歴史的に秩序変動の原動力の一つとなってきた民衆運動がどのように解釈・評価され消費されてゆくのかは、現代中国人の意識構造を考える上でも一つの興味深い視点になるものと思う。

### 注

i　本稿は、中国民衆運動史の通時代的・総合的な把握とデータベース作成を目指す研究プロジェクト「日本・中国・台湾の研究者による中国民衆運動の史実集積と動態分析」（2007～2010 年度科学研究費補助金［基盤研究（A）］、研究代表者：吉尾寛高知大学教授）による調査旅行の一部に関する記録である。プロジェクトメンバーとして調査に参加したのは、都築晶子（龍谷大学・後漢末～西晋末及び北朝～唐初華北担当）、葭森健介（徳島大学・東晋～劉宋初期及び唐代以前全体総括担当）、榎本あゆち（東海大学・南朝～隋末江南担当）、伊藤宏明（鹿児島大学・唐～五代担当）、北村一仁（龍谷大学大学院）の各氏に柴田（愛知江南短期大学・後漢中期以前担当）を加えた 6 名で、これに 2008 年 3 月調査では藤堂光順（河合塾）、2008 年 10 月調査では福原啓郎（京都外国語大学）、何徳章（武漢大学）の各氏が加わった。上記の諸先生からは、旅行中もまたそれ以後も、本稿の作成に直接結びつく多くのご教示を受けている。ここに記して謝意を表する。なお本稿で使用した写真は、全て柴田により撮影されたものである。